
朝に道を聴けば夕べに死すとも可なり

沓名 滯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝に道を聴けば夕べに死すとも可なり

【Nコード】

N0258V

【作者名】

沓名 澪

【あらすじ】

中学2年生の篠原芽衣は、六歳はなれた兄、慧のことが大っ嫌いだった。キツカケは、五年前の父の死。その日から確実に何かが壊れ始めていた。

真実を知り、戸惑いながらもゆっくりと真実を解き明かしていく――

壺 口は災いの元

「えっ、芽衣ってお兄ちゃんいたの!？」

そう言って体を乗り出してきた友人に、篠原芽衣は体を縮こませた。

「うっそー。あたし、芽衣は絶対一人っ子だって思ってたのにー」

「私も！ 芽衣って面倒見がいいからもし兄弟がいても弟か妹かなって」

口々に喋る友人達の話聞いて、芽衣は俯く。

元々、教える気などなかったのに……と、芽衣は唇を噛んだ。

中学からの友達である彼女達に芽衣は兄がいるということを一切告げていなかった。だが、小学校の頃からのクラスメートである伊藤佳奈子があっさりと芽衣の隠していたそれを、いとも簡単にバラしたのである。

「名前はなんて言うの？」

そう聞いたのは、芽衣の今、一番の親友とも言える村上有沙だった。芽衣は、観念したかのように口を開いた。

「慧、だよ」

篠原慧。20歳。とある国立大学の2年生。中学2年生である芽衣と6歳離れた兄。

そして、芽衣が世界で1番嫌っている人間である。

壱 口は災いの元（後書き）

初投稿です。不慣れで色々とおかしいところがあるかと思いますが、見逃してやってください。

式 昔は昔、今は今

重たい足どりで家へと帰ると、玄関には鍵がかかっていなかった。兄が家にいる証拠である。

芽衣はそれを見てますます気分が重たくなっていった。

「あれ？ 芽衣、帰ってたの？」

ヒョイ、トリピングから顔を覗かせたのは、芽衣の兄である慧。エプロンを着て、片手にはさいばしと言ったまるで漫画にでもできそうな状態だ。

「今日はバイト、ないの？」

「うん。今日は休み」

ニコニコしながら慧は言う。

靴を脱ぐ芽衣に、慧は「ちゃんと手は洗いなよー」なんて言いながらキッチンへと戻って行った。

成績優秀。スポーツ万能。容姿淡麗。人柄も良く、いつだってニコニコと愛想の良い笑みを浮かべている。妹である芽衣に対しても、いつだって優しい。兄を知る者は、誰だって芽衣に「良いお兄ちゃんだね」とか、「芽衣は優しいお兄ちゃんがいればいいなあ」とか、「私も芽衣のお兄ちゃんみたいなお兄ちゃんが欲しい！」なんて言

う。

芽衣には、自慢の兄だった。

小学生の頃は、将来の夢をテーマにした作文を書きなさい、という課題が出されれば、必ず「お兄ちゃんみたいになりたい」だったし、「世界で1番好きなのは誰？」と、問われればそれは勿論、兄だった。

芽衣は溜息をつきながら自分の部屋へと足を進める。鞆を置き、制服を脱いで着替えていると、慧の「夕飯、できたからね」という声が耳に入った。

暫くしてリビングへと向かえばもう既に、夕飯はテーブルに並べられていた。今日の夕飯であるコロッケを見て、芽衣はまた溜息をついた。

「さあ芽衣、食べようか」

ニコニコしながらそう言って椅子に座る慧。慧はいつもはアルバイトがあるため、家にいない。1人じゃない夕食は久しぶりだった。それでも。

それでも、芽衣には全てが鬱陶しかった。

目の前でニコニコと微笑みながらコロッケを食べる慧も、皿に盛られているコロッケさえも。

「どうしたの？ 芽衣、コロッケ好きだったよね。具合でも悪いの？」

全く夕食に手をつけようとしない芽衣に、慧は心配そうに芽衣の顔を覗き込んだ。芽衣は、そんな慧に嫌気が差し、「大丈夫」なんて言いながらようやく箸を手にとった。

コロッケが好き。そんなの、昔の話。今では、嫌い。慧は、それをわかっていない。だって、芽衣は慧にそのことを言っていないから。

芽衣は、昔は慧のことが大好きだった。仲の良い兄妹だった。

だけど芽衣は幼い頃から慧に対して、何かわだかまりのような、黒い、不思議な感情を持っていた。でも、幼い芽衣はその小さな感情が何だか理解することができず、そつと胸の奥へとしまいこんでいた。

それが段々と表面に現れ出したのは、五年前。芽衣が小学3年生の頃からだった。

父が、死んだのだ。

それまで主婦だった母は仕事に出ることになり、慧が家の家事を母に代わってし始めるようになった。その頃からだ。慧に対するその醜い感情が表面へと溢れ出てきてしまったの顔をは。

慧は本当によくしてくれた。

家事を全てやり、その合間に勉強をし、名の知れた有名な大学に特待生として授業料を必要とせずして入学することができた。そして、今は一家の家計を保つ為にアルバイトをしている。

「本当に良いお兄ちゃんだね」

いつも、芽衣はそう言われてきた。芽衣も、そう思っている。昔は芽衣はそう言われることが何よりも好きだった。まるで、自分のことを褒められているようで。とても、嬉しかった。

でも、今は違う。そう言われることが何よりも嫌だ。

芽衣は箸を置き、手を合わせて小さくごちそうさま、と呟いて、いつものように席を立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0258v/>

朝に道を聴けば夕べに死すとも可なり

2011年10月9日10時59分発行